地質ニュース478号，33頁，1994年6月
Chishitsu News no. 478, p. 33, June, 1994

最近のサハリン地質調査事情

加藤　孝幸[1)]

サハリンの地質調査は，戦前は石炭や石油の調査を主として行われていたようである．また，八木健三氏による第三紀アルカリ火山岩の研究を含め，火成岩の研究，中生界～新生界の層序学的研究，ススナイ変成岩の研究など日本に残っている成果も多い．戦前に北緯50°の日ソ国境より少し南の気屯(けとん：現スミルヌィフ)でデスモスチルスの全身骨格が発見され，北海道大学にその標本が保存されていることもよく知られている．

戦後1960年になって，小岩井　隆・佐々　保雄両氏により戦前の地質文献が集大成され，北緯50°以南についての25万分の1樺太地質図が編纂された．

石油関係では，1976年から1983年にかけて日・ソ協力によるサハリン陸棚の石油・天然ガスの探鉱がサハリン石油開発協力㈱によって行われ，日本から一定の地質家が調査に参加している．

さて，ごく最近のソビエト崩壊寸前からサハリンへの外国人科学者の渡航が次第に増えるようになった．この背景には，当然ソビエト(ロシア)側の受け入れ姿勢の変化がある．

1988年に日ソ協会道連の旅行団は，地質家を含めた10数名の研究者を同行させた．サハリンの州都ユジノサハリンスクには，科学アカデミーの出先である海洋地質学地球物理学研究所(C. Sergeev 所長)があり，また，一方で地質省の出先であるサハリン州地質公団(D. Shaimardanov 総裁)がある．この時は，両機関が共同して地質グループ(五十嵐八枝子団長)の世話に当たっている．この地質グループはその後，北方圏地質研究会(北川芳男会長)を1989年に創った．今日まで主として，州地質公団(現，極東地質公団)を通して，ススナイ変成岩類，白亜紀付加体，第三紀火山岩類，第四系などサハリンの地質調査や研究者の相互訪問を続けている．

一方，文部省の科学研究費や学会の助成金を受けて，海洋地質学地球物理学研究所を通してのサハリンの調査も行われるようになった．例えば，1989年以降にまずサハリンの白亜紀付加体や第四系を研究するグループ(木村　学氏，奥村晃史氏，L. Jolivet 氏ら)が調査に入っている．その後も四国や新潟の大学から数名が主として白亜紀付加体の調査に入った．このようにサハリンの地質に取り組む大学・研究機関の研究者も増えてきた．

最近のロシアのインフレ・物不足をはじめとする混乱や，日ロの関係がギクシャクしたままであるなど不安定要因もまだある．しかし，アジア大陸東縁の地質を研究するものにとって，それまで，外国人の入域制限地域であったサハリンは重要な存在であり，この流れは止まらないものと考えられる．今後，学生や若い研究者がどんどんサハリンを訪れ，ロシアの研究者と協同で仕事を進めるようになることを期待している．

写真1　地質調査中の食事風景．
ススナイ山地南東部の海浜にて(1990年7月)．地質調査中の食事は充分に時間をとる．火を起こし，煮焚をすることも多く，おにぎり等で手早くすませる日本人は面食らう．車は地質局の調査用“バス”．

1) アースサイエンス株式会社代表取締役

キーワード：サハリン，地質調査